

2022年度 理論言語学講座 概要

時間:19:00-20:40(100分)

通年講座 (前期と後期で2つの講座)

時間:19:00-20:40(100分)

前期 2022年5月16日～ 全10回

後期 2022年10月3日～ 全10回(祝祭日の講義はありません)

<p>火曜日</p>	<p>『「する」と「なる」の言語学』とその周辺 — 共時的、通時的に、そして学際的にも 認知言語学Ⅱ</p> <p style="text-align: right;">池上 嘉彦(いけがみ・よしひこ) 東京大学名誉教授、昭和女子大学名誉教授 【認知言語学】 オンライン</p>
	<p>講義概要</p> <p>外国語と多かれ少なかれ苦労してつき合った経験のある人なら、誰しもその反面、いつの間にか自然と身についた自分の母語とは、(勉強して多かれ少なかれ身につけた外国語と較べて)一体どういう言語なのかと改めて考えてみたくなるはずです。『「する」と「なる」の言語学-言語と文化のタイポロジーへの試論』と題された書物(大修館書店、1981)も、そのような問いかけから生まれたもの — エッセイ風の考察と言語学的な論考との中間あたりを念頭に置いての著作でした。変形文法一色に染まっていた時期には異端的な存在と見做されていたらしいですが、現在まで18刷を重ね、今では認知言語学的な先駆的試みと受けとめられているようです。昨年度は、丸山真男の著名な論考「歴史意識の『古層』」に触れ、そこで提示されているくなる・なりゆく&gt; — &lt;つぎ・つぎつぎ&gt; — &lt;いきおい&gt;という概念系列について、言語(学)的な観点からどのような展開が可能かを末広がり的に検討してみました。本年度は漸く、「&lt;スル&gt;的な言語と&lt;ナル&gt;的な言語」という論点を下記論考に沿って具体的に考察するという段階にはいります。</p>
	<p>テキスト・参考文献</p> <p>「表現構造の比較 — &lt;スル&gt;的な言語と&lt;ナル&gt;的な言語」(国広哲弥編『日英語比較講座・第4巻・発想と表現』(pp.82-110)研究社、1982)を pdf でテキストとして共有。その他多くの関連文献からの引用をハンドアウトとして配布。</p>
	<p>この課目で前提とされる知識など</p> <p>日本語母語話者でなくても、日本語に特別な関心があり、そして(当然ですが)ある程度の習熟度のある人なら、歓迎です。母語話者であるならば、母語話者として日本語を改めて考えてみるという試みの魅力を体験してほしいと思います。認知言語学については、専門的な知識は必要なく、言語への深い関心があれば十分です。</p>
	<p>講義形態</p> <p>ハンドアウトを参照しながらの講義形式が中心になります。</p>
	<p>プロフィール</p> <p>東京大学で英語英文学(B.A., M.A.)、Yale 大学大学院で言語学(M.Phil., Ph.D.)を専攻。イデリア大学、ミュンヘン大学、バルン自由大学、チュービンゲン大学、北京日本学研究中心、などで客員教授、ハヴル大学、ロンドン大学、などで客員研究員。日本認知言語学会名誉会長。著書:『英詩の文法』(研究社)、『意味論』(大修館書店)、『「する」と「なる」の言語学』(大修館書店)、『ことばの詩学』(岩波書店)、『詩学と文化記号論』(講談社)、『記号論への招待』(岩波書店)、『&lt;英文法&gt;を考える』(筑摩書房)、『日本語と日本語論』(筑摩書房)、『自然と文化の記号論』(日本放送出版協会)、『英語の感覚・日本語の感覚』(日本放送出版協会)など。学術書翻訳、論文、多数。</p>
<p>木曜日</p>	<p>「なぜ」を問うところから何が見えてくるか 日本語文法理論Ⅰ</p> <p style="text-align: right;">尾上 圭介(おのえ・けいすけ) 東京大学名誉教授 【日本語文法理論】 オンライン</p>
	<p>講義概要</p> <p>母国語の文法に関する思索のおもしろさは、「なぜ」を問うところにある。その「なぜ」の90パーセントは、下の(A)(B)のいずれかである。 (A) 言語の根源的大問題をめぐって、「なぜ」を問う。 (A-1) どの言語にも品詞として名詞と動詞がある。なぜか。</p>

		<p>(A-2) 文 (述定文) に主語と述語があるのはなぜか。  (A-3) 述語がなくても文としての意味を伝えうるのはなぜか。  〈述定文と非述定文〉 〈すべての文で、文の意味とは存在承認か希求〉  (A-4) 述語の文法的意味として、過去・現在・完了などの時間性と、推量・意志・可能性などのモダリティ (非現実領域の事態を語るときの意味) とがある。なぜか。そもそもモダリティとは何か。  〈現実界存在と非現実界存在〉  (B) 日本語の個別文法形式の多義性に関して「なぜ」を問う。下はその一例。  (B-1) 動詞スル形が多義性の由来 (眼前の運動の描写・命令・主語の性質など)  (B-2) 動詞シヨウ形が多義性の由来 (〔終止法〕推量・意志・勧誘・命令、非終止法) 未実現・可能性など)  (B-3) ラレル形述語が多義性の由来 (可能・意図成就・自発・尊敬・受身など)  (B-4) 係助詞ハが多義性 (題目提示・対比・当該事態への集中など) の由来、その多義性 (列記不能なぐらい多様) の由来  ○ (B) の「なぜ」は、その文法形式固有の語性と結果的に表す意味 (用法) を峻別して、語性から論理的に用法を導き出すという方法によってこそ説明できる。〈語性用法派〉の観点。  ○ (A) (B) 両方を理解するための見解として、文の意味とは、大きく言ってしまえば、〈存在承認〉か〈希求〉である。</p>
	テキスト・参考文献	尾上圭介『文法と意味Ⅰ』(くろしお出版、2001)
	この課目で前提とされる知識など	必要ない。新奇な議論を受け止める柔軟な頭脳さえあれば。
	講義形態	講義形式で進めていきます。
	プロフィール	<p>東京大学名誉教授  大阪市生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了(国語学)。博士(文学)。専攻は文法論、意味論、文法史、および「大阪のことばと文化」。著書に『文法と意味Ⅰ』(くろしお出版、2001)、『大阪ことば学』(岩波現代文庫、2010)、『朝倉日本語講座第6巻』(編著、朝倉書店、2004)、日本語文法学会編『日本語文法事典』(共編大修館書店、2014)など。</p>
金曜日	生成文法をとおして科学研究の楽しさを知る 生成文法Ⅰ (入門)	<p style="text-align: right;">大津 由紀雄 (おおつ・ゆきお)  関西大学客員教授・慶應義塾大学名誉教授  【生成文法入門】  オンライン</p>
	講義概要	<p>この講義では生成文法について基礎から学びます。  前期の前半部では、近年「言語生物学 (biolinguistics)」と呼ばれることが多い、認知科学・神経科学としての生成文法について解説します。この理解が不鮮明であると生成文法の発展や今後の展望について理解がおぼつかないの、丁寧に説明します。主たる参考文献は N. Chomsky. 1965. <i>Aspects of the theory of syntax</i>. MIT Press の第1章 (福井・辻子による邦訳『統辞理論の諸相---方法論序説』岩波文庫あり) です。  前期の後半部からは、A. Carnie. 2021. <i>Syntax: a generative introduction (fourth ed.)</i>. Wiley Blackwell と渡辺明. 2009. 『生成文法』東大出版会とを適宜利用しながら、統語論を例に生成文法の言語分析の方法を講じます。Carnie 2021 は英語で書かれた教科書ですが、平易な英語で書かれています。同書を読み、英語文献を読む</p>

		力をつけることも可能です。2冊手元に置いておくと便利ですが、どちらか1冊とすることであれば、Carnie 2021 を用意してください。 《生成文法に入門すべく試みたがうまくいかなかった》《生成文法に興味はあるが敷居が高い》という向きにお勧めです。
	参考図書	文中参照
	前提とされる知識など	言語学、認知科学などについて前提とされる知識は特段ありません。必要なのは知的好奇心と旺盛な探求力です。
	講義形態	講義形式で進めますが、できるだけ演習の要素も取り入れます。
	プロフィール	関西大学客員教授、慶應義塾大学名誉教授。 一貫した知的関心は認知科学としての生成文法（ことに、母語獲得と統語解析）にあります。その研究成果をもとに言語教育の在り方を考えることも重要な課題だと認識しています。日本認知科学会フェロー。Ph.D. (MIT)。今西典子・大津由紀雄, 2017.「時間表現の発達---時間の言語化にみられる普遍性と多様性の観点からの考察」 <i>Brain and Nerve</i> 69(11) 1251-1271、大津由紀雄, 2016.「ことばについて知ることの大切さ」『日本語学』35(2) 2-12、大津由紀雄, 2015.「ことばの認知科学」 <i>Clinical Neuroscience</i> 38(3) 877-881 など。

**前期講座**（半期単位で受講可能講座） 2022年5月16日～ 全10回(祝祭日の講義はありません)  
時間:19:00-20:40(100分)

	言語研究の全体像を知る 言語学概論	<p>嶋田 珠巳(しまだ・たまみ)明海大学教授 松本 曜(まつもと・よう)国立国語研究所教授 松井 智子(まつい・ともこ)東京学芸大学教授 大堀 壽夫(おおほり・としお)慶應義塾大学教授 窪菌 晴夫(くぼぞの・はるお)国立国語研究所名誉教授(2022年4月以降)</p> <p><b>【言語学概論】</b> オンライン</p>
月曜日	講義概要	<p>この講義では言語研究の5つの主要分野について、各分野の専門家が2回(2週)ずつレクチャー形式で解説を行います。「言語学概論」はこれまで半期の課目として、一人の講師がすべての分野をカバーする形で開講されてきました。今年度は前期と後期の二期に分けて開講し、合計20回の講義を計10名の講師が分担する形で、言語研究の各分野の考え方と言語研究の面白さを解説いたします。半期だけの履修も可能ですが、言語研究の全体像を理解するためにも両期とも受講されることをお勧めします。</p> <p>今期は社会言語学、形態論・語形成論、語用論、認知言語学、音声学の5分野について解説したいと思います。単位取得を希望する人は5名の講師が一題ずつ出すテーマから1つを選んでレポートを提出していただきます。</p>
	テキスト・参考文献	各講師が指定(もしくは配布)する。
	この科目で前提とされる知識など	ことばに関心のある人はどなたでも受講できます。言語学を一から学びたい方、言語研究の全体像をもう一度理解したい方、大学等で言語学概論をどのように教えたらいいか模索している方に特にお勧めの授業です。
	講義形態	講義形式で進めます。
	プロフィール	下記以外は各講師の講義欄参照

	<p>松本曜          国立国語研究所理論・対照研究領域教授          専門は、意味論、形態論、統語論、語用論、類型論、認知言語学。主著に <b>Complex predicates in Japanese</b> (CSLI Publications)、編著に『移動表現の類型論』(くろしお出版)などがある。</p> <p>大堀壽夫          慶應義塾大学環境情報学部教授          Ph.D.(言語学)を1992年にUC Berkeleyより取得。主として意味論、機能的類型論(特に接続構造の類型と通時相)、談話分析、日本語、英語、東アジア諸語について研究。『認知言語学』(2002, 東京大学出版会)、「従属節の階層を再考する:南テールの理論的基盤」(2014, 益岡隆志他編『日本語複文構文の研究』, ひつじ書房)、M. トマセ編『認知・機能言語学』(共訳 2011, 研究社)。</p>
	<p>「生成文法の企て」の本質を考える          生成文法Ⅱ 極小主義の現在</p> <p style="text-align: right;">福井直樹 (ふくい・なおき)          上智大学教授  <b>【生成文法】</b>          オンライン</p>
月曜日	<p>講義概要</p> <p>Noam Chomsky 氏が日本言語学会で行なった講演を基にして『言語研究』に寄稿した Minimalism: where are we now, and where can we hope to go (2021)という論考を読みながら、そこに書かれていることに inspire される形で、生成文法を中心とする様々な知的分野に関して自由にディスカッションを行なっていきたいと思います。</p> <p>生成文法の知的背景をなす近代科学革命の思想, アメリカ構造主義言語学の伝統との対比, 単純性を巡る科学哲学的議論, 計算の理論と生成文法, 言語能力の発生・進化, I 言語と外在化の関係, 「極小主義の強いテーゼ」(SMT)と併合の新たな定式化, SMT が持つ促進機能の検討, 等々が話題になるかと思えます。</p> <p>生成文法的思考の根本部分と先端部分の議論を参加者のみなさんと共有したいと思っています。</p>
	<p>テキスト・参考文献</p> <p>テキストは Chomsky, Noam (2021) Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go. 『言語研究』160号。サイドリーディングとして, 酒井邦嘉他(2022)『脳とAI—言語と思考へのアプローチ』中公選書。その他の参考文献は講義の中で紹介していきます。</p>
	<p>この課目で前提とされる知識など</p> <p>言語を中心として幅広い知的興味を持っていることを期待します。言語学入門, 生成文法入門程度の基礎知識があれば, ディスカッションを理解するうえで役に立つと思いますが, 必須というわけではありません。分析的に物事を考える習慣, わからないことをわからないままにしない態度は必要です。</p>
	<p>講義形態</p> <p>講義演習方式です。積極的に議論に加わっていただくことを期待しています。</p>
	<p>プロフィール</p> <p>上智大学大学院言語科学研究科教授          専門は、理論言語学, 認知科学。マサチューセッツ工科大学言語学・哲学科博士課程修了(Ph.D., 1986)。ペンシルベニア大学言語学科助教授, カリフォルニア大学アーバイン校言語学科教授などを経て, 2003年より上智大学教授。主な著書に <i>Theoretical Comparative Syntax</i> (2006), 『新・自然科学としての言語学』(2012), <i>Merge in the Mind-Brain</i> (2017), <i>Symmetrizing Syntax</i> (2022, 共著)などがある。</p>
火曜日	<p>「こころ」にせまる母語獲得研究          言語心理学 母語獲得研究入門</p> <p style="text-align: right;">杉崎 敏司 (すぎさき・こうじ)          関西学院大学教授  <b>【言語心理学】</b>          オンライン</p>
	<p>講義概要</p> <p>「こころ」(mind)のさまざまな領域について、その発達には先天的要因と後天的要</p>

		<p>因の両方が関与しており、発達はその相互作用によって説明されるべきことが明らかとなっています。生成文法と呼ばれる言語理論は、母語知識はこころの領域の一つであり、その獲得は①人間に生まれつき備わっている母語獲得のための内的メカニズムと②生後に取り込まれる言語情報との相互作用によって達成されると仮定しています。つまり、母語知識は多くの人々が素朴に思い描いているように子どもが大人の発話を模倣することによって獲得されるのではなく、その発達の筋道と到達点が遺伝によってあらかじめ定められていると考えるのです。この授業では、この生成文法理論の仮説が妥当であることを示す実際の母語獲得（特に日本語と英語の獲得）からのさまざまな証拠を議論します。生成文法理論に基づく母語獲得研究の意義や研究方法、主な研究成果や今後の課題について、できるだけわかりやすく説明します。</p>
	テキスト・参考文献	<p>テキスト：教科書は使用せず、ハンドアウトを配布します 参考文献：杉崎 敏司 (2015) 『はじめての言語獲得—普遍文法に基づくアプローチ』（岩波書店）</p>
	この課目で前提とされる知識など	<p>前提知識は特に必要ありません。生成文法理論に関する基礎知識があると、理解が深まります。</p>
	講義形態	<p>主に講義形式で進めますが、受講生の皆さんからの積極的な質問を期待しています。</p>
	プロフィール	<p>関西学院大学教授 生成文法理論に基づく母語獲得研究を専門にしています。主に、日本語や英語を対象に、文の構造や意味にかかわる性質の獲得について調査を行っています。2003年コネチカット大学言語学科博士課程修了(Ph.D. in Linguistics)。主要著書・論文に『はじめての言語獲得—普遍文法に基づくアプローチ』（2015年 岩波書店 日本英語学会賞）、“On the Acquisition of Prepositions and Particles” (2016年 <i>The Oxford Handbook of Developmental Linguistics</i>, OUP)など。</p>
	認知言語学Ⅱ	<p>池上 嘉彦(いけがみ・よしひこ) 東京大学名誉教授 【認知言語学】 内容は通年講座を参照</p>
水曜日	英語を歴史的・通時的にみる 英語史概論	<p style="text-align: right;">堀田隆一(ほった・りゅういち) 慶應義塾大学教授 【史的言語学】 オンライン</p>
	講義概要	<p>英語という言語の特徴を理解するためには、それがたどってきた歴史を学ぶことが不可欠です。英語の起源はどこにあるのか、英語に見られる不規則性は何に由来するのか、英語はいかにして世界的な言語となったのか等の問題に歴史的・通時的な視点からアプローチすることで、多面的な英語観、言語観を形成することが本講義の目標です。英語史の通史を描いていきますが、とりわけ内面史（言語体系の変化）と外面史（言語を取り巻く社会の変化）の連動に注目します。</p> <p>講義は、主にテキストではなくスライドを利用して進める予定です。参考文献は適宜紹介していきますが、まず堀田隆一（著）『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』（研究社、2016年）を参照してください。</p>
	テキスト・参考文献	<p>堀田 隆一 『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』 研究社、2016年。</p>
	この課目で前提とされる知識など	<p>必須ではありませんが、入門・概論レベルの言語学の知識があると望ましいです。また、英語のほかにフランス語やドイツ語などの印欧語を学んでいると英語史の理解が深まります。</p>
	講義形態	<p>スライドを参照しながらの講義形式が中心になります。</p>

	プロフィール	<p>慶應義塾大学教授。PhD (Glasgow University, 2005)          主要出版物：『英語の「なぜ？」に答えるはじめての英語史』（研究社、2016年）、          『英語史で解きほぐす英語の誤解 --- 納得して英語を学ぶために』（中央大学出版部、2011年）、『スプリングの英語史』（翻訳）（早川書房、2017年）、<i>The Development of the Nominal Plural Forms in Early Middle English</i> (Tokyo: Hituzi Syobo, 2009)。英語史の話題を日々提供する「hellog~英語史ブログ」  <a href="http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/">(http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/)</a> も継続中。</p>
	失われつつある言葉から言語学を学ぶ 言語学入門 言語の多様性入門	<p style="text-align: right;">長屋 尚典 (ながや・なおのり)          東京大学准教授          【言語学入門】          わらひ</p>
水曜日	講義概要	<p>今年 2022 年は国際連合総会によって宣言された「国際先住民言語の 10 年 International Decade of Indigenous Languages」 (IDIL2022-2032: <a href="https://en.unesco.org/idil2022-2032">https://en.unesco.org/idil2022-2032</a>) の 1 年目です。これは 2019 年の「国際先住民言語年」に続くもので、現在危機的状況にある先住民言語の保存、再活性化、奨励・向上を目指しています。先住民言語を守り、言語の多様性や多言語使用を維持していくことは、持続可能な開発目標 (SDGs) の達成のために重要な要素だと考えられています。</p> <p>この記念すべき年にこの授業では、世界的に、言語学、言語の多様性、そして危機言語の最良の入門書の呼び声高い Evans, Nicholas. 2010. <i>Dying Words: Endangered Languages and What They Have to Tell Us</i>. Malden, MA: Wiley-Blackwell. を教科書にとりあげ、先住民言語を中心とした世界の言語の多様性入門します。それを通して、世界の言語の多様性の理解に欠かせない言語学の入門的知識も同時に学んでいきます。音声学、音韻論、形態論、統語論、意味論、文字論などの各分野を少しずつ勉強します。</p> <p>ふだん読み書きしている日本語や英語以外の言語をたくさん観察することになり、何が何だかわからないこともあると思いますが、授業を通して言語学を学び、改めて言語学の「めがね」で観察すると、その美しさや不思議さを理解できるでしょう。</p>
	テキスト・参考文献	<p>適宜資料を配ります。          授業はスライドまたはハンドアウトで行います。教科書についてはガイダンスで指示します。</p> <p>Evans, Nicholas. 2010. <i>Dying Words: Endangered Languages and What They Have to Tell Us</i>. Malden, MA: Wiley-Blackwell. (日本語訳: ニコラス・エヴァンズ (2013) 『危機言語: 言語の消滅でわれわれは何を失うのか』 京都大学学術出版会.)</p>
	この課目で前提とされる知識など	入門なので前提知識は必要ありません
	講義形態	講義形式で進めます。
	プロフィール	<p>東京大学大学院人文社会系研究科・准教授。          PhD in Linguistics (Rice University, 2011)          オーストロネシア諸語、フィールド言語学、言語類型論。主要著作・論文: 「意図と知識—タガログ語の ma-動詞の分析—」 (2019, 『認知言語学を拓く』), “Thethetic/categorical distinction in Tagalog revisited: A contrastive perspective” (2019, 『言語研究』), “Focus and</p>

		prosody in Tagalog”(2018, Hyun Kyung Hwang との共著, <i>Perspectives on Information Structure in Austronesian languages</i> ) <a href="https://sites.google.com/site/naonorinagaya/">https://sites.google.com/site/naonorinagaya/</a>
木曜日	日本語文法理論 I 尾上 圭介(おのえ・けいすけ 東京大学名誉教授 【日本語文法理論】 内容は通年講座を参照。	
	IPA をもとにして音声学的な知識と技能を学ぶ 調音音声学  中川 裕 (なかがわ・ひろし) 東京外国語大学教授 【音声学】 オンライン	
	この授業では、IPA (International Phonetic Alphabet) を用いた調音訓練を通して音声学の基礎を身につけることを目指します。世界の言語で音素的に区別される多様な音声に関わる調音的な知識と技能を学びます。受講者には、解説を受動的に聞くだけでなく、IPA 記号の手本の発音の模倣をしてもらいます。そして、参加者の発音に関する教師からのフィードバック (正誤と発音補正の方法) を授業中に共有することを積み重ねます。その過程で、調音の内省能力と聞き分け能力は進歩します。参加者の積極的な取り組みを期待します。 受講者にとって耳慣れない発音も多く扱いますが、日本語で聴き慣れているはずの発音が、調音音声学的にはどのように理解できるか、その微細な違いが IPA でどのように表記し分けられるかも解説します。さらに、IPA の記述用語と音韻論の弁別素性の用語との対応を解説することで、音声学と音韻論の用語上の橋渡しをします。 この授業を通して得た音声学の知識と技能は、音声学・音韻論的な記述を正確に読みとるためにも、言語音の歴史的变化を理解するためにも、言語学的フィールドワークのためにも、応用音声学的研究のためにも役立ちます。	
テキスト・参考文献	教科書は使用せず、プリントアウトを配布します。	
この課目で前提とされる知識など	とくにありません。	
授業形態	模倣発音の実習を交えながら講義を進めます。	
プロフィール	東京外国語大学総合国際学研究院教授 ; PhD (Linguistics) 音声学、音韻論、コイサン言語学 主要業績は下記のページをご覧ください。 <a href="https://researchmap.jp/nhirosi">https://researchmap.jp/nhirosi</a>	
金曜日	生成文法 I 大津 由紀雄 (おおつ・ゆきお) 関西大学客員教授 【生成文法入門】 内容は通年講座を参照。	
	日本語文法を最深部から説き起こす 川端文法入門  小柳 智一(こやなぎ・ともかず) 聖心女子大学教授 【日本語文法理論】 オンライン	
	講義概要	かつて「大文法家時代」には「山田文法」「松下文法」「時枝文法」など、固有名を冠する文法論がいくつもありました。川端善明の「川端文法」はその掉尾を飾る、日本語文法論の最高峰です (私はひそかに哲学史上の『純粹理性批判』になぞらえています)。川端文法は 1950 年代末から 70 年代にかけて主要な部分が構築されましたが、当時から哲学的で難解と評され、読解に挑んで破れた読者も多く、また誤読もされてきました。 川端文法が難解に映るのは、通常では考えられないほど深いところから説き起こし、思考の道筋を厳密に、かつ凝縮した表現で書き留めるからです。しかし、きちんと辿っていけば思考を追うことができ、深甚な知見に心動かされ、先見の明に驚

	<p>き、透徹した論理に納得します。川端文法を知るとは、そのような体験をすることです。日本語文法に関心のある方には、ぜひ川端文法を体験していただきたいと思います。</p> <p>本講義では、川端の論文「用言」（1976）をなぞるように読み、必要に応じて他の論文も参照しながら解説していきます。この論文は講座物の1編として用言を論じるものですが、川端文法の概論にもなっている、驚異的な論文です。</p>
テキスト・参考文献	教科書は使用せず、使用する資料（オリジナルの資料を多く含む）はすべて配布します。参考文献は授業時に随時紹介します。
この課目で前提とされる知識など	特にありませんが、言葉と世界に対する素朴な好奇心と、複雑さを楽しむ精神の柔軟さと、少しの根気強さがあれば、とても望ましいと思います。
講義形態	講義形式で進めていきます。
プロフィール	<p>聖心女子大学現代教養学部教授</p> <p>1999年国学院大学大学院文学研究科博士課程後期修了、博士（文学）。</p> <p>専門は日本語学、日本語文法史。</p> <p>主な著作は『文法変化の研究』（くろしお出版、2018）、『認知言語学を拓く』（共著、くろしお出版、2019、「副詞の入り口—副詞と副詞化の条件—」執筆）、『日本語と世界の言語のとりたて表現』（共著、くろしお出版、2019、「日本語のとりたて表現の歴史」執筆）、『構文と主観性』（共著、くろしお出版、2021、「4種類の「主観」の用語法」執筆）など。</p>

後期講座（半期単位で受講可能な講座） 2022年10月3日～ 全10回(祝祭日の講義はありません)  
時間:19:00-20:40(100分)

月曜日	<p>言語研究の全体像を知る 言語学概論</p> <p style="text-align: right;">長屋 尚典(ながや・なおのり)東京大学准教授  佐野 哲也(さの・てつや)明治学院大学文学部英文学科教授  川村 大(かわむら・ふとし)東京外国語大学教授  吉田 和彦(よしだ・かずひこ)京都産業大学客員教授  高橋 将一(たかはし・しょういち)青山学院大学教授</p> <p style="text-align: right;">【言語学概論】 オンライン</p>
	<p>講義概要</p> <p>この講義では言語研究の5つの主要分野について、各分野の専門家が2回(2週)ずつレクチャー形式で解説を行います。「言語学概論」はこれまで半期の課目として、一人の講師がすべての分野をカバーする形で開講されてきました。今年度は前期と後期の二期に分けて開講し、合計20回の講義を計10名の講師が分担する形で、言語研究の各分野の考え方と言語研究の面白さを解説いたします。半期だけの履修も可能ですが、言語研究の全体像を理解するためにも両期とも受講されることをお勧めします。</p> <p>今期は言語類型論、言語心理学、日本語文法理論、史的言語学、生成文法の5分野について解説したいと思います。単位取得を希望する人は、5名の講師が一題ずつ出すテーマから1つを選んでレポートを提出していただきます。</p>
	<p>テキスト・参考文献</p> <p>各講師が指定(もしくは配布)する。</p>



	この課目で前提とされる知識など	ことばに関心のある人はどなたでも受講できます。言語学を一から学びたい方、言語研究の全体像をもう一度理解したい方、大学等で言語学概論をどのように教えたらいいか模索している方に特にお薦めの授業です。
	講義形態	講義形式で進めていきます。
	プロフィール	<p>佐野 哲也          明治学院大学文学部英文学科教授 言語獲得。          University of California, Los Angeles, Ph.D. in Linguistics          主要著作：“Remarks on theoretical accounts of Japanese children’s passive acquisition,” in <i>Generative Linguistics and Acquisition: Studies in Honor of Nina M. Hyams, John Benjamins</i>, 2013. など</p> <p>川村 大          東京外国語大学大学院教授          国語学(文法、文法論、日本語史)。          1990年東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。博士(文学)。『ヲル形述語文の研究』(くろしお出版、2012)、「動詞ヲル形述語文と無意志自動詞述語文との連続・不連続について」(『国語と国文学』89巻11号、2012)「ヲル形述語文における自発と可能——古代語からわかること——」(『日本語学』32巻12号、2013)など。</p> <p>吉田 和彦          京都産業大学外国学部客員教授          京都大学名誉教授。コーネル大学 Ph.D.(言語学)          高橋 将一          青山学院大学文学部英米文学科教授          統語論、意味論、統語論と意味論のインターフェイス。          2006年マサチューセッツ工科大学大学院博士課程言語学・哲学科修了、Ph.D.          主要論文:The hidden side of clausal complements. <i>Natural Language &amp; Linguistic Theory</i> 28:343-380、More than two quantifiers. <i>Natural Language Semantics</i> 14:57-101 など。</p> <p>その他の講師は各講師の講義欄参照</p>
月曜日	Langackerを読む：認知文法の基礎から最前線まで 認知言語学 I	<p style="text-align: right;">西村 義樹(にしむら・よしき)          東京大学教授  <b>【認知言語学入門】</b>          オンライン</p> <p>講義概要</p> <p>この講義では、「言語（表現）の意味とは何か」、「文法は意味とどのように関係しているのか」、「語彙と文法はいかなる関係にあるのか」、「そもそも文法(的)な知識の単位は何のためにあるのか」、「言語の使用を可能にする知識とはいかなるものか」等の言語学の根本問題に対する認知文法(cognitive grammar)の考え方を、この理論の創始者 Ronald W. Langacker の著作を深く正確に読み解くことを通して、多角的に検討します。ここまでは一昨年度と昨年度の講義とほぼ同じですが、今年度は、この理論の基本的な考え方を正しく理解したい人やこれからこの理論に本格的に取り組みたい人を主な対象として、草創期から 2010 年頃までの文献を中心に</p>

		な題材とし、最後に最新の展開を紹介する、という構成にする予定です。英語が専門でない人にも原典に真剣に取り組むことの意義と楽しさを十分に共有していただけるように努力します。
	テキスト・参考文献	講義で用いる(画面共有する) テキストはこちらで準備してあらかじめ受講者にお送りする予定です。基本的な参考文献のリストは開講前にお送りする予定ですが、それ以外の文献も講義中に適宜紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	(認知文法を含む)認知言語学についての知識は前提としませんが、開講前に西村義樹・野矢茂樹著『言語学の教室:哲学者と学ぶ認知言語学』(中央公論新社)を通読されることをお勧めします。受講者には日本語で書かれた基本的な文献をいくつか開講前にお送りする予定です。
	講義形態	講義形式で進めます
	プロフィール	東京大学文学部(言語学研究室)教授 専門は認知言語学、意味論、日英語対照研究。 1989年東京大学大学院人文科学研究科博士課程(英語英米文学専攻)中退。 『構文と事象構造』(共著、研究社、1998)、『認知言語学Ⅰ:事象構造』(編著、東京大学出版会、2002)、『明解言語学辞典』(共編著、三省堂、2015)、『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ:生成文法・認知言語学と日本語学』(共編著、開拓社、2016)、『メンタル・コーパス:母語話者の頭の中には何があるのか』(共編訳、くろしお出版、2017)、『認知文法論Ⅰ』(編著、大修館書店、2018)、『慣用表現・変則的表現から見える英語の姿』(共編著、開拓社、2019)、『認知言語学を拓く』、『認知言語学を紡ぐ』(いずれも共編著、くろしお出版、2019)など。
火曜日	語用論の基礎から応用まで 語用論入門	松井 智子(まつい・ともこ) 中央大学教授 【語用論】 オンライン
	講義概要	語用論は、会話を中心とした日常的なコミュニケーションのメカニズムを研究する学問分野です。会話で使われる言葉の意味を解釈するとき、また会話の中で言葉になっていないメッセージを汲み取るとき、どちらも相手の「意図」や「態度」といった、目には見えない心の状態を推し量ることが鍵になります。この講義では、コミュニケーションにおいて、相手の意図や態度を推測する能力を「語用能力」としてとらえます。そしてその働きや発達、障害について考察していきます。さらに広告やコマーシャルといった、視聴者の購買を促すことを目的とした情報伝播を取り上げ、コミュニケーションの一形態としてその特徴を語用論の枠組みで検討します。広告やコマーシャルは、メッセージの送り手が見えにくいことが多く、その特徴は SNS などに見られるメッセージと共通しています。このようなコミュニケーションにおいては、聞き手がメッセージの送り手の真意を正しく把握することが難しくがちです。この授業では、語用論の理論に基づいて、それはなぜなのか、考えていきます。
	テキスト・参考文献	テキスト：今井邦彦編 「最新語用論入門 12章」 大修館 2009年 参考文献：Tanaka, K. 1999. <i>Advertising Language: A Pragmatic Approach to Advertisements in Britain and Japan</i> . Routledge.

	この課目で前提とされる知識など	特にありません。
	講義形態	講義に加え、ワークシートやグループセッションも予定しています。
	プロフィール	中央大学文学部教授 ロンドン大学ユニバーシティカレッジ文学部言語学科博士課程修了（PhD）。 著書に <i>Bridging and Relevance</i> (John Benjamins, 2000, 市河賞)、『子どものうそ、大人の皮肉』（岩波書店 2013 年）、『ソーシャルブレインズ』（分担執筆、東京大学出版会、2009）、『ミス・コミュニケーション』（分担執筆、ナカニシヤ、2011）などがある。
	認知言語学	池上 嘉彦(いけがみ・よしひこ)東京大学名誉教授 【認知言語学】 内容は通年講座を参照。
水曜日	語形成から言語と心の仕組みを探る 形態論・語形成論	杉岡 洋子(すぎおか・ようこ) 慶應義塾大学名誉教授 【形態論・語形成論】 オンライン
	講義概要	この講座では「語」という単位の性質や、複数の要素から語が作られる仕組みを取り上げます。たとえば、「ばえる」、「わかりみ」、「歩きスマホ」といった新語はどのように作られ理解されるのか、その形と意味に観察される一般化がどのような原則あるいは私たちの知識や心の仕組みによって説明できるかについて学びます。 語はレキシコン (=頭の中の辞書) に登録されることにもとづく性質 (語彙性) を持つと同時に、複数の要素から成る語は、一定の条件下で組み合わせで作られるという性質 (規則性) も示します。そのため、語形成を文法モデルの中でどう位置付けるかは、生成文法における名詞化をめぐる議論(Chomsky 1970 など)を発端に 50 年以上にわたって重要な論点となってきました。講義では、日本語と英語の派生語や複合語の具体的な分析について論じながら、それが言語理論の枠組みの選択や人間の心の仕組みの理解にどうつながるのかについても触れる予定です。
	テキスト・参考文献	授業で使用する資料とテキストはオンラインで配布し、参考文献は授業で必要に応じて紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	専門的な予備知識は特に必要ありません。
水曜日	講義形態	講義が中心ですが、質問やコメントを受ける時間、および課題について議論する機会を設ける予定です

	プロフィール	<p>慶応義塾大学名誉教授 シカゴ大学大学院言語学科博士課程修了(Ph.D.) 語形成や語彙意味論、形態論と統語論の関係、語の処理に関わる心や脳のしくみを研究しています。 主要著書・論文：『語の仕組みと語形成』（共著、研究社、2002）、「I-2 形態論・語形成」（『よくわかる言語学』、ミネルヴァ書房、2019）、『名詞の意味と構文』（分担執筆、大修館、2011）、「語の処理の心的・脳内メカニズム」（共著、『形態論』、朝倉書店、2016）。Derivational affixation in the lexicon and syntax (with Takane Ito), <i>Handbook of Japanese lexicon and word formation</i>, pp.347-386. Mouton de Gruyter, 2016.</p>
		<p>言語の社会関与性を探究する 社会言語学</p> <p style="text-align: right;">嶋田 珠巳(しまだ・たまみ) 明海大学教授 【社会言語学】 オンライン</p>
	講義概要	<p>&lt;社会&gt;は&lt;言語&gt;とどのように関わり、その関わりはどのような言語現象に見ることができるのでしょうか。そして、言語学理論にどのように&lt;社会&gt;を組み合わせることが可能なのでしょうか。</p> <p>今年度は、社会言語学のそのものずばりであるような「言語の社会関与性」をテーマに、言語接触、言語変化、社会言語学の理論と実践といった内容を扱います。社会言語学全体を見渡してこの学問領域の特徴をつかんだうえで、とくに深入りするのは、言語接触と文法、さらに言語とアイデンティティ。見ているのは言語使用（ないし使用された言語）、発話、ディスコースであり、考察するのは言語の中と外とそのインターフェイスです。初めての方から研究の領域に足を踏み込んでいの方までを想定して、「話者の見える言語学」としての社会言語学の魅力に誘います。</p>
	テキスト・参考文献	教科書は使わず、ハンドアウトを配布します。参考文献は適宜紹介します。
	この課目で前提とされる知識など	<ul style="list-style-type: none"> <li>・とくにありません。なんらかの言語学の知識があるとなお理解の幅が広がると思えます。</li> <li>・「教室」でのディスカッションがあらたな知のきっかけになるかもしれません。</li> </ul>
	講義形態	講義と文献講読によって進めます。
	プロフィール	<p>明海大学外国語学部教授 2007年京都大学大学院文学研究科行動文化学専攻言語学専修博士後期課程修了。博士（文学）。著書に、『英語という選択—アイルランドの今』（岩波書店 2016年）、共編著に『言語接触—英語化する日本語から考える「言語とはなにか」』（東京大学出版会 2019年）、『時間と言語』（三省堂 2021年）、共著書に『時間はなぜあるのか？—チンパンジー学者と言語学者の探検』（ミネルヴァ書房 2022年）など。おもな論文として“Speakers’ awareness and the use of <i>do be</i> vs. <i>be after</i> in Hiberno-English”, <i>World Englishes</i> 35, 2016年。研究テーマとして「言語知識とその更新—アイルランド英語の現代的諸相からの理論と検証」など。</p>
木曜日	日本語文法理論Ⅰ	尾上 圭介(おのえ・けいすけ 東京大学名誉教授) 【日本語文法理論】 内容は通年講座を参照。
	フィールドワークにおける音声学・音韻論的な調査手法の基礎を学ぶ フィールド音声学	<p style="text-align: right;">中川 裕 (なかがわ・ひろし) 東京外国語大学教授</p>

	【音声学】 オンライン
	<p>この授業では(1)フィールド音声学と(2)フィールド音韻論の実習をします。</p> <p>(1)手軽な道具で記録できる器械音声学的資料の収集・分析の手法を学びます。具体的には、口唇の撮影およびパラトグラフィー（舌と口蓋の接触の撮影）による調音的資料や、録音の音響分析資料（波形やスペクトログラムなど）から、重要な音声特性を読み取る訓練をします。そして、音の対立や変異をより良く記述するために音声資料を有効活用する能力を養います。ここで学ぶ手法は、野外調査の現場だけでなく、日常的な環境でも利用でき、広く調査研究に役立てることができます。</p> <p>(2)未知の言語の調査は、基礎単語の発音を音声表記することから始めます。単語の表記の記録を溜めながら、音声的観察と同時に、音韻的分析を進めます。そして、その言語の音韻体系の骨格をまず把握します。このフィールド調査における音韻的分析の過程には、音声学・音韻論の本質を実践的に理解するための要諦が含まれます。この授業では、受講者にとって未知の言語の音声表記資料を使って、音韻分析を実習し、その言語の音韻体系の一部を解明する演習を行います。受講者は音韻論的分析の基礎を体得することができます。</p>
テキスト・参考文献	教科書は使用せず、プリントアウトを配布します。
この課目で前提とされる知識など	調音音声学的の基礎的な知識・技能（たとえば IPA の基本の理解）を持っていることが期待されます。
授業形態	実習を交えながら講義を進めます。
プロフィール	東京外国語大学総合国際学研究院教授；PhD (Linguistics) 音声学、音韻論、コイサン言語学 主要業績は下記のページをご覧ください。 <a href="https://researchmap.jp/nhirosi">https://researchmap.jp/nhirosi</a>
金曜日	<p>「意味」の意味を掘り下げる 意味論の基礎</p> <p style="text-align: right;">酒井 智宏 (さかい・ともひろ) 早稲田大学教授 【意味論】 オンライン</p>
講義概要	<p>意味論は理論言語学の中で一番とっつきやすい分野に見えて実は一番とっつきにくい分野です。その理由の一つは、ただの「意味論」という分野が存在しないことです。存在するのは形式意味論、語彙意味論、認知意味論、etc.であって、「意味論」ではありません。この講義では、どの立場に立つにせよ、意味(論)について最低限心得ておきたい問題をじっくり考えてみましょう。</p> <p>私の担当する意味論は 2018 年度、2019 年度、2021 年度に続いて四回目です。2018 年度は「意味は言語使用者の心の状態によっては決定されず、物理的環境に依存する」という意味の物理的外在主義を、2019 年度は「概念・思考は社会環境に依存する」という概念・思考の社会的な外在主義を、2021 年度は社会的な外在主義に対する批判を扱いました。2022 年度は引き続き物理的外在主義・社会的な外在主義に関する論文を丁寧に読みながら、意味(論)の基礎を掘り下げてみたいと思います。</p> <p>継続して受講する方にとっても、今回から新たに受講する方にとっても、等しく有意義な講義となるように努めます。</p>

テキスト・参考文献	プリントを配布します。参考文献は、授業中に紹介します。
この課目で前提とされる知識など	予備知識は必要ありません。
講義形態	講義形式で進めます。
プロフィール	早稲田大学文学学術院教授 意味論、語用論。 2003年東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了、博士(学術) 2004年パリ第8大学大学院言語学専攻博士課程修了、Docteur en Sciences du Langage 主要著作:『正しく書いて読むための英文法用語事典』(分担執筆、朝倉書店、2019)『最新理論言語学用語事典』(分担執筆、朝倉書店、2017)、『理論言語学史』(分担執筆、開拓社、2017)

### 理論言語学講座夏期集中

※100分×10コマの講義の時間数を3日間で変則的に組み込みます。時間割が決まり次第、研究所公式サイト等でお知らせいたします。

8月5-7日	言葉が何かを意味するというのはどういうことなのか? 言語哲学入門  <p style="text-align: right;">野矢 茂樹 (のや・しげき) 立正教授 【言語学特殊講義】 対面+オンライン</p>
講義概要	言葉について哲学します。そもそも哲学するとはどういうことかを説き起こすところから始めましょう。現代の言語哲学の祖とも言えるべき哲学者はフレーゲです。この講義ではまず伝統的考え方(意味の観念説)を示して、その伝統的考え方への批判を踏まえて、フレーゲの考え方を見ていきます。フレーゲ的枠組は「文脈原理」と「意味の二相化(SinnとBedeutung)」ですが、意味の二相化についてはあまり踏み込まないつもりです。また、ラッセルの記述理論も言語哲学入門の定番の話題ですが、省略します。フレーゲ的枠組から受け継ぐべき考え方として文脈原理を中心に説明します。続けてフレーゲ的な考え方を越える考え方を見ていきます。古典的概念観から新しい概念観へ、記号的言語観からコミュニケーション的言語観へ、あるいは言語変化についてといった話題を取り上げたいと考えています。とても煩瑣な議論が展開される現代の言語哲学ですが、この講義ではあまり細かく複雑な議論には立ち入りません。そのかわり、言葉を哲学するときの考え方の根っこに触れることができるのではないのでしょうか。
テキスト・参考文献	ハンドアウトを配布します
この課目で前提とされる知識など	きわめて入門的な講義ですから、予備知識はまったく不要です。
授業形態	講義形式で進めます。
プロフィール	立正大学文学部哲学科教授 専門は哲学。 東京大学大学院博士課程単位取得退学。 主な著書に、『論理哲学論考を読む』(ちくま学芸文庫、2006年)、『哲学・航海日誌』(中公文庫、2010年)、『大森荘蔵』(講談社学術文庫、2015年)『心という難問』(講談社、2016年)、『語りえぬものを語る』(講談社学術文庫、

		2020年)、『哲学探究という戦い』(岩波書店、2022年)など。
8月19-21日	日本語固有の現象から文周縁部構造を司る普遍性に迫る 生成文法Ⅲ カートグラフィー研究と日本語の文周縁部構造	齋藤衛(さいとう・まもる) 南山大学教授 【生成文法】 オンライン(予定)
講義概要	<p>Luigi Rizzi 氏のイタリア語の分析(1997)に端を発して、様々な言語の文周縁部構造が研究され、その構造の背後にある普遍的なメカニズムも解明されてきました。日本語についても、補文標識の統語的・意味的性質に関する研究に加え、上田由紀子氏のモーダルの研究、遠藤善雄氏の終助詞の研究などがあります。本講義では、これらの研究を詳細に検討した上で、(1) 文周縁部構造を選択制限と意味解釈から説明することはできるのか、また、その場合には、どのようなカートグラフィー構造が導かれるのか、(2) 日本語の補文標識の分析に基づいて、Gottlob Frege 氏の「意義と意味について」(1892)以降、長らく問題とされてきた補文の意味解釈についてどのような帰結が得られるのか、特に、命題、事象、発話といった概念の位置づけを明確にすることができるのか、(3) 日本語の Wh 句は、イタリア語と同様に、焦点句として分析されるべきなのか、また、そうであるとすれば、Wh 疑問文など、Wh 句を含む表現はどのような意味表示を持つことになるのか、といった問いを追求します。</p>	
テキスト・参考文献	適宜、講義資料を配布します。また、参考文献は、講義の中で紹介していきます。	
この課目で前提とされる知識など	言語学入門、統語論入門程度の知識を前提とします。	
プロフィール	<p>南山大学国際教養学部国際教養学科教授</p> <p>1979年スタンフォード大学哲学科卒業。1985年MIT言語学博士課程修了。句構造、移動、省略など、多くの現象について研究を重ね、統語論に関する仮説を提示してきた。主要著書には、<i>Move a</i> (H. Lasnik と共著, 1992, MIT Press)、<i>The Free Word Order Phenomenon</i> (J. Sabel と共編著, 2005, Mouton de Gruyter)、<i>Japanese Syntax in Comparative Perspective</i> (編著, 2014, Oxford University Press) などがある。</p>	